

李禹煥の絵画と復古主義—もの派の理念をすり替えた民画について

朴淳弘（東京藝術大学）

李禹煥（1936- ）は、1960年代後半から70年代にかけて日本で起こった美術動向のひとつであるもの派の代表作家として知られている。もの派は、当初トリッキーな文脈で理解されていた関根伸夫の《位相—大地》（1968）に対して李が独自の解釈を行ったことから始まったとされる。その後、石や木、ガラスや鉄板など、未加工の素材そのものを組み合わせて関係を示す作品を発表しはじめた李は、作品制作だけでなく西洋近代美術の表象批判を特徴とする批評活動を繰り広げ、日本に限らず母国韓国の美術界にも反響を呼んだ。近年、地域と地域を横断するトランスナショナルな美術史の解釈が進む中、注目されるようになった李の意義も日韓両国にわたって彼の理論と作品が共有されていたという事実にある。その発端となったのが、李の「韓国現代絵画展」（1968）への参加である。

実際、李禹煥には一貫した絵画への志向があった。本来油絵を専攻していたため、彼が過去の芸術的遺産を批判的に検討したうえで、絵画の制作に取り組むことができたという点もしばしば指摘されてきた。すると、異質な素材の組み合わせによる李の立体作品《関係項》シリーズ（1969）と、それと平行して作られた絵画作品《点より》《線より》といったシリーズ（1973）との間にはどのような関連性が認められるのか。本発表が注目するのは、こうしたジャンルの相違をなくさせ、かつ両方を結びつけたかのように見える彼の民画論をめぐる議論である。本発表では、もの派の論客としての李と李朝民画の研究者としての李という、彼の二つのイメージを重ね合わせることによって、いまだに不明瞭なまま残されている両者の関係を明らかにすることを目指す。

先行研究は、李禹煥はもっぱらハイデガー的な意味での根源に迫ろうとした結果、大衆文化という生活共同体の重層性に端を発する近代批判を展開しなかったと見なす傾向がある。しかし、李の民画論にはいささか自嘲的な側面もあるが、民衆の欲望の現れ方への分析などが行われている点において、当時の思想的潮流や研究動向との関係が推察できる。また、それまで《関係項》に限定して自身の「出会い」理論を用いていた李は、それに当てはまる作品を《点より》《線より》にまで広げるようになる。つまり、人間の体験が広がる開かれた構造としての場づくりを試みる李は、自身の作品制作を放浪画家の民画制作になぞらえることによって、彼ならではの近代批判を完遂しようとしたのである。こうして本発表は、李の思想の根底にある他者志向性を考えるうえでひとつの視座を示す。

アメリカの美術批評家クレメント・グリーンバーグは、イマヌエル・カントをその理論的支柱とするモダニズムの批評家として広く知られている。その重要な契機とされているのが1960年の「モダニスト・ペインティング」である。そこでは、カントは自己批判を行った最初の人物であり、それゆえに最初のモダニストであったと主張されている。グリーンバーグによれば、そのカント的な自己批判は19世紀以降、哲学のみならず芸術の領域においても要求されるようになり、芸術はそのメディアムの固有性を追求するようになった。その結果、モダニズムの絵画はマネ以降、自己批判のプロセスを経てその固有の条件としての平面性と純粹視覚性へと還元されるに至る。このようにグリーンバーグはカントを、モダニズム絵画の歴史を自己批判の単線的な発展史として記述するための依代としたのであった。もとよりグリーンバーグによるカントの重要性の主張は「モダニスト・ペインティング」のみならず、1971年のベントン大学でのセミナーの後、その講演内容を精練し纏め上げられた著作にも認められグリーンバーグにとってカントは彼の美学的な思索においても主要な位置を占めていた。

これまでグリーンバーグにおけるカント美学という主題は多くの語彙をもって語られてきたが、概ね次のような批判的な解釈に分類できる。第一に、グリーンバーグが趣味の客観性について主張するとき彼はカントを引き合いに出しているが、そこにはカント理解の不備があり、グリーンバーグはカントの立場と相反して経験主義者であるという解釈である（Thierry de Duve: 1996）。第二に、グリーンバーグの美的判断はメディアムの慣習の歴史的な知識を必要とする。従ってそれは、カント美学における概念から自由である純粹な趣味判断とは相容れないというものである（Jason Gaiger: 1999）。第三に、グリーンバーグの理論は経験主義的であるためカント的というよりもむしろヒューム的であるが、それはカントの自由美と付随美の区別に関するグリーンバーグの不徹底さに因るものであるという解釈である（Diarmuid Costello: 2007）。第四に、上記の解釈から引き出されることでもあるが、グリーンバーグは芸術家の「インスピレーション」の役割を強調しながらも芸術家の創造的な側面にはおよそ関心がないという解釈である（Ken Carpenter: 2009）。

本発表では上記の解釈を踏まえ、グリーンバーグにおけるカント美学の問題から彼の批評に認められる芸術家の独創性の問題を考察する。グリーンバーグの美術批評／美的判断には、芸術家の存在とその精神的な自由が考慮されており、彼のいう「インスピレーション」や「ヴィジョン」は、カント美学の芸術美の判定における芸術家の「精神」や「美的理念」と構造的な共通性を有している。本発表は、このことを明らかにすることによって、これまで幾度も俎上に載せられてきたグリーンバーグとカントの共通性・相違性に関する新たな解釈を提示する。